様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　５月２８日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２００６～２００８
課題番号：１８５２０６０１
研究課題名（和文）　スウェーデン地誌教育にみる地理思想－「ニルスの不思議な旅」をテキストとして
研究課題名（英文）　Geographical thought based on the education of regional geography in Sweden: a case study of “The Wonderful Journey of Nils”

研究代表者　　村山　朝子　（MURAYAMA　TOMOKO）
茨城大学・教育学部・准教授
研究者番号：40375358

研究成果の概要：
百年前にスウェーデンで地理読本として著された『ニルスの不思議な旅』の成立過程とその内容から地理教育の普遍的思想を探った。国土・地方に対する認識を深め、自然と人間の共生と近代化との調和をめざす同書の主張は、地理教育の普遍的思想であり、持続可能な社会を模索する今日の地理教育に示唆するところが大である。同書は、各地の教員による情報提供や著者の現地調査に基づいており、当代の様々な情報収集による一大地誌プロジェクトでもある。その作成過程、事実をふまえた物語性、スケールを変えた地域描写なども今日の地理教育教材に参考になる。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	1,200,000	0	1,200,000
２００７年度	700,000	210,000	910,000
２００８年度	900,000	270,000	1,170,000
総　計	2,800,000	480,000	3,280,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学
キーワード：スウェーデン、ニルスのふしぎな旅、地理教育、地誌、環境教育、地理思想

１．研究開始当初の背景

我が国における地理教育は長く知識偏重、地名、物産の暗記教科と捉えられがちであった。その一方で、昨今の学校教育の地理は技能、方法知に重点が移っている。高校では地理の履修者が大幅に減少傾向にある。こうした状況下、地理教育の意義を問い直し、そのあり方を検討することは緊要の課題である。

スウェーデンの児童文学の古典的名作として知られる『ニルスの不思議な旅』は、百年前に小学校の地理読本として作成された作品であるが、今もなお世界中で読み継がれて

おり、再評価の声も高まっている。同書は地理教育の本質的意義を検討するテキストとして有効であると考えた。

２．研究の目的

『ニルスの不思議な旅』の成立背景、制作過程、内容について調査研究し、その地理思想を明らかにすることを通して、地理教育の本質的・普遍的意義について検討し、我が国の地理教育の改善の方策をたてる。

３．研究の方法

スウェーデンで地理読本として誕生した『ニルスの不思議な旅』（原題：ニルス・ホルゲルソンの不思議なスウェーデン旅行）を取りあげ、その成立背景、制作過程、内容、影響等を調査研究した。資料の収集はおもに王立図書館や書店、古書店など現地で行った。初版本から最新本までの書籍、指導のためのハンドブック、書簡集など同書および著者に関連する書籍のほか、スウェーデン地誌に関する書籍、地図類を入手した。王立図書館では同書研究者でありライブラリンであるアン・シャルロット氏の協力のもと、同書作成に関わる著者と出版社や依頼組織との間で交わされた契約や書簡などの生資料や当時の雑誌等の貴重資料を入手した。これら文献の調査と合わせて同書に描かれた地域への現地調査を行い、地誌的記述の分析を行った。さらに同書研究者や翻訳者への聞き取り等により、研究を進めた。

こうした調査研究の成果をふまえて、大学の教養の授業において同書を資料としてその地誌的テキストとしての有効性、地理思想の読み取りについて調査した。

４．研究成果

児童文学の古典的名作として知られる『ニルスのふしぎな旅』は、そもそもスウェーデンの自然や地理が学べる読本として約百年前にセルマ・ラーゲルレーヴにより執筆されたものである。

まず調査研究の結果明らかになった同書誕生の背景、制作過程の概要は以下の通りである。

スウェーデンで一般民衆の子弟に初等教育が普及するのは 19 世紀後半である。1890 年代には教科書改訂がなされるものの、子どもの実態と乖離した教科書への批判が教育現場の内外で高まる。なかでも初等教育における教科書の中心的役割を果たしていた読本に批判が集中した。『ニルス』を著したのち 1909 年にはノーベル文学賞を受賞するラーゲルレーヴであるが、作家で生計が立てられるようになるまで約 10 年間教職についていた彼女も当時の教育や教科書にきわめて批判的であった。

初等教育の向上を目的として 1880 年に結成された小学校教員組合は 1901 年、新読本作成のための委員会を立ち上げる。道徳的な内容に偏した読本を改め、スウェーデンの国土や自然、民俗などについての理解も深めることのできる読本作成が提案された。読本委員会の中心となったのが、組合の創設者で、初等教育と中等教育との統合運動に尽力し、のちに文部大臣も務めたフリチューヴ・ベル

イと小学校教員のアルフレッド・ダリーンである。

1901 年秋、すでに作家としての地位を不動のものとしていたラーゲルレーヴへの執筆の打診は、ダリーンから彼女の友人で師範学校教授のオランデルを介してなされた。委員会が示した大まかな方針を受けて、ラーゲルレーヴは内容に関して自分自身の考えを示す。「子どもたちが十分に知るべき最初のものは、自分たちの国である」と確言し、「地方ごとの小さなお話を通して国全体を描く」こと、「地図に命を吹き込み、子どもたちの想像力のために、森や湖、畑や牧草地、村、城、農場、すべてのあらゆる町で地図を満たす」ことに強い意欲をみせ、地理読本の重要性を強調している。

1902 年 1 月には委員会との間に覚え書きが取り交わされ、正式にラーゲルレーヴが著者、ベルイやダリーンが発行者となることが決定した。ラーゲルレーヴは委員会からの要請をそのまま受け入れることはしなかった。委員会が共同執筆を考えていたのに対して、一人で執筆することを条件とした。委員会が資料を収集し提供し、あがった原稿の内容を確認することなども決められた。

こうしてラーゲルレーヴによる読本執筆活動がスタートした。最初の作業は情報収集であった。その年の 11 月には各地の地誌、動植物、伝説、民話、民謡などに関する膨大な書籍のリストがラーゲルレーヴのもとに送付された。とくに動植物についての専門書をよく読んだ。

地理文献のなかでラーゲルレーヴがもっとも活用したと思われるのが地図類そして『スウェーデン観光協会年鑑』である。19 世紀後半には鉄道敷設により未開の北部は森林や鉱山などの開発地域となる。その北部に観光地という新たな性格を与えようとしたのが、「自分の国を知ろう」をモットーに 1884 年設立されたスウェーデン観光協会であった。1890 年に刊行が始まった年鑑は各分野の第一人者の研究者や文筆家が執筆にあたり、北部ばかりでなく国内各地についての紀行文や人々のくらしや自然などについての文章、そして多数の写真が掲載された。郷土の外にも目が向きはじめた当時の人々の関心とも合致し、年鑑は教養書として多数の読者を得た。委員会によるリストを待つまでもなくラーゲルレーヴは年鑑を愛読しており、委員会からの打診に対して彼女は年鑑に掲載された紀行文を例に構想を述べてもいる。執筆の際には、とくに掲載された多数の写真が各地の景観描写の具体的な手がかりになっているとみられる。

しかし、文献による情報に飽きたらず、彼女はさらに生の地域情報を求めた。委員会は要請に基づき、各地の教員に具体的な情報の提供を依頼した。項目には、サーメ（原住民）と開拓者との関係、林業の工程、北部での穀物栽培、登山、狩猟、実在する人物のライフヒストリーなど、きわめて具体的な事柄があがっている。

さらにラーゲルレーヴは自ら現地取材にも赴いた。1903 年には南部、1904 年夏には北部に調査旅行に出向いている。鉄道敷設間もなく鉱山開発が始まったばかりのキルナ

やイエリバレの詳細な記述は、実際に見聞きしたからこそ書けた描写である。

ラーゲルレーヴは、こうして委員会と連携しながら情報を収集し、そのうえで作家としての創作に入った。地図や写真はニルスが見た上空からの眺めとなり、動物はその生態に即した登場人物となり、景観描写には地域の樹木や草花も加えられた。教員らから集めた実在人物のライフヒストリーは老女や農夫による“語り”となり、現地調査で見聞きした事柄は幼い少女の体験として再現された。「話がフィクションになっても、描写は本物でなくではならない」という主張どおり、出所の異なる一つ一つの事実は彼女によってフィクションに変異し、オリジナル性の高い、ガチョウの背に乗ってスウェーデンを旅するニルスの物語に仕上がった。

完成した同作品は、近代化の途上にあるスウェーデンにおいて当時の読本に対して批判的な小学校教員の組織と依頼されたラーゲルレーヴとによる新地理読本作成の一大プロジェクトであり、さまざまな方法を駆使して集められた地理情報をもとに作られた一大動態地誌であったといえよう。1906 年に第 1 巻、1907 年に第 2 巻が刊行された『ニルスのふしぎな旅』は、学校で教材として使用されるばかりでなく、書店に並べられて子どもから大人までに広く親しまれる名作となったのである。

20 世紀初頭のスウェーデンは、工業社会への転換期、近代化の只中にあった。その一方で、地方の疲弊、農業の衰退、外国への人口流出が問題となっていた。人口の国外や都市への流出に歯止めをかけ、地方や農業を維持しながら開発を進めていくことが急務であり、そのためにも国土・郷土愛の育成が近代化を進めるスウェーデン国家の緊要の課題であった。ラーゲルレーヴはそうした社会的要請を受け止めつつも、あからさまに説いてはいない。“地域の個性の尊重と地方の多様性の受容”そして“自然と人間との共生”という地理思想を根幹において事実を描写しつつ、それらを子どもたちの想像力、空想力を高めるフィクションでくるんだ。確実な情報に基づき丁寧に描かれた一つ一つの話は、地理に根ざすアイデンティティの共有を促し、国土と郷土に対する認識と愛情、誇りを高めるのに成功している。ニルスは各地での様々な体験をとおして人間的に成長していく。“自分はどこでどう生きていくのか”を常に自分に問いかける。その問いは読者あるいは学習者である子どもらにも向けられる。この“地域の個性の尊重と地方の多様性の受容”そして“自然と人間との共生”という地理思想をベースに“自分はどこでどう生きていくのか”と問い続けることに、地誌教育の普遍的で本質的な地理思想を見いだすことができる。

なお研究の過程で、大学の教養教育においては総合科目の社会・国際系科目として「環境社会スウェーデンを読み解く－『ニルスの不思議な旅』を手がかりに」という授業を 3 回実施した。この授業では、環境大国といわれるスウェーデンの原点を同書から探ろうというもので、現地調査の成果を視聴覚機器等を活用して提示しながら、授業を進めた。

その結果、学生のレポートの記述などから、的確に地誌的内容を読み取るとともに、自然と人間との共生という同書の思想についての深い読みがみられ、時代や国を超えた同書の思想の普遍性と地誌教材としての有効性が検証された。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①村山朝子「百年前のスウェーデンの地理読本『ニルスのふしぎな旅』誕生の経緯とその背景」人文地理 61-1, pp.98-100, 2009．査読無.

〔学会発表〕（計１件）

①村山朝子「百年前のスウェーデン地理教科書『ニルスのふしぎな旅』人文地理学会, 2008.11.8，筑波大学.

〔図書〕（計３件）

①村山朝子「スウェーデンの地理教育」中村和郎他編『地理教育講座 第Ⅰ巻 地理教育の目的と役割』1-4-4，pp.157-170，2009，古今書院.

②村山朝子「寒冷地の生活（スウェーデン）」中村和郎他編『地理教育講座 第Ⅳ巻 地理教育と系統地理』4-4-4，pp.906-918，2009，古今書院.

③村山朝子「スウェーデンの地理教育カリキュラム」山口幸男他編『地理教育カリキュラムの創造 小・中・高一貫カリキュラム』第５章３節，pp.191-198，2008、古今書院.

６．研究組織

(1)研究代表者

村山　朝子（MURAYAMA TOMOKO）

茨城大学・教育学部・准教授

研究者番号：40375358

(2)研究分担者

無

(3)連携研究者

無